
反乱の灯火

有象無象

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

反乱の灯火

【Zコード】

Z0265BA

【作者名】

有象無象

【あらすじ】

ごく普通の高校生である俺は、突然異世界に召喚される。待つていたのは奴隸のような生活だった
在する世界。腐敗した支配階級、貧困にあえぐ国民。そして奴隸たち。彼が見たものは、余りにも衝撃的だった。これは、独りぼっちになつた彼が、自由を求めて奮闘するお話

突然の出来事（前書き）

処女作です。完結できるよう精一杯努力していきますので、どうか温かい目で見守って下さい。誤字脱字やおかしな表現等ありましたら、どんどん指摘をお願いします。

突然の出来事

今日は、一年間でもかなり喜ばしい日だね。

学生である自分が、毎日の勉強から長期間解放される、その初日。

そう、夏休みだ。

といつても、今日は終業式がある日。教師やら校長やらの長つたるい話をこれからじつと聞いていなければならぬことを考へると、憂鬱な気分になる。が、それも午前でおわり、午後からは自由を満喫できることを考えれば、必ずとテンションが上がつてくるものだ。

俺は高橋徹夜、16歳。身長は169cm。高一で、部活には入っていない。なので、別段毎日忙かつた訳はないが、それでも夏休みだ。当然高校から課題が出るが、もう既に半分ほど終わっているし、アルバイトの予定も一週間ほどないので、今日の午後からしばらく遊びほうけても問題はない。

さつき部屋で目が覚めて、今は7時。バスの時刻まではまだ時間がある。俺は食パンをトースターに放り込んでから、顔を洗いに洗面台へと向かい、鏡と向かい合う。

今日はあまり寝癖がついていない。目にかかる程度に伸びた黒髪は、珍しく爆発していなかつた。

冷水で顔を洗つて、再び鏡を見る。映し出された俺の顔は、そこそこ、だと自分では思つ。

中学校時代はサッカー部だったからか、だいぶ日に焼けていた。

洗顔を済ませた俺は着替えも終え、目玉焼きを作つて、焼きあがつた食パンにのせて食べた。そこで、昨日醤油を買っておけば良かつ

たと後悔する。とろりと程よく半熟な田玉には、醤油が合づ。パンに乗せて食べても、それは変わらない。

俺は高校に入つてから一人暮らしだ。中学校の時は両親と三人家族で住んでいたが、俺の強い要望により、親も一人暮らしを認めてくれた。今は、親からの仕送りとアルバイトの給料で生活している。俺の住んでいるマンションは学校からはバスで通わなければならぬいほど遠いが、コンビニもスーパーもバス停も近くにあるので、何も困ることはない。

とくに持つて行く物もなく、いつもよりかなり軽い鞄を持ってマンションの4階にある部屋を出た。エレベーターに乗つて1階まで降り、五分ほどでバス亭に着いた。すぐに来たバスに乗り込む。残念ながら座れないようだが、学校まで十数分なので、とくに問題はなかつた。学校に到着して少し経ち、チャイムが鳴つた後、俺は友人とたわいもない話をしながら、教師の指示に従つて体育館へと向かい、そして。

地獄の時間が始まつた。

・・・・・ ありえない。なぜこうも長引くんだ？

自分が同じことを一度以上言つてることに気がつかないのか。この耄碌じじいが！

なんて言つ訳にはいかないが、それにしても長い。30分は続いているだろう。

俺の周囲の同級生達は半分ほどが寝ていた。俺も寝ることに決めた。

終業式も終わり、放課後。

俺はまだ家に持つて帰つていなかつた、勉強に必要な荷物を鞄に詰

めて、学校を出た。

寄り道をすることもなくマンションまで帰ってきた俺は、エレベーターに乗り込む。他に誰もエレベーターに乗つてこないことを確認してから、4階のボタンを押した。扉が閉まり、上昇が始まる。

そして、異変が起こった。

その光に気付くのに時間はかからなかつた。視界の下、足元。視線を下げる俺が見たのは、エレベーターの床全面が白く光り輝いている光景だった。

驚きの声を上げる間もなく全身が光に包まれ、視界が白く塗りつぶされる。

1階から2階へと上がる途中、エレベーターの中に爆光が満ち、すぐに消えた。

目的の4階に着き、エレベーターの扉が開かれる
そこには誰の姿も無かつた。

混乱

何だ、ここは・・・?

目を覚ますと、全く知らない場所にいた。いや、正確には、知識として知つてはいるが、俺は今まで直接こんな場所に来たことはない。連れてこられたのか？ そう思つたが、こんな場所に“連行”される理由を作つた覚えもない。第一、“連行”するにしても、現代にこんな場所を使用する者はいないだろう。

牢屋だ。

三方を石壁に囲まれ、残りの一面には鉄格子がはめ込まれている。俺はいま、鉄格子を正面に見て右側、隅に置かれたベッドに寝こんでいた。

訳がわからない

なぜ俺はこんな所にいるのか。混乱する頭で必死に考えるが、答えは浮かんでこない。今現在分かるのは、俺が捕らわれていることと、何者かに連れ去られたらしい、ということだけだった。

一応、ベッドから立ち、俺から見て鉄格子の左側にある扉を開けようとするが、予想どおり鍵が掛かっている。後ろを振り返つても窓はなく、また鉄格子に視線を戻しても、脆そうな部分はない。ピッ

キングツールでもあれば開錠できるかもしれないが、あいにくそんな道具もスキルもない。脱出は不可能だ。

待て、ここで目を覚ましたということは、一度意識を失つたということだ。意識を失う前、なにがあった？ 犯人の顔とかを見ていなーいか？

こんなことにも気付かないとは、今の俺の脳みそはよほど混乱しているようだ。

なにがあった？

思い出した。

学校から帰つて、マンションに到着して、エレベーターに乗ると、突然床から光が

そこで意識が途切れたんだ。

・・・・・ 結局、俺がなぜ牢屋にぶち込まれているのかは不明のままだ。

あの光はなんだつたのか。俺が犯人の姿を見ていないことを考えれば、俺はあの光によつて氣絶させられたことになる。スタンングレネードか？ いや、スタングレネードは爆音と閃光で相手を無力化する手榴弾の一種だ。そんな鉄の塊がエレベーターに投げ込まれれば氣付かない筈がない。それに、スタングレネードの閃光だと仮定するなら、最初にエレベーターの床が光つっていたことの説明がつかない。

「ああもう、一体なんなんだ！」

つい口に出してしまつた。少しして、物音。何か物が擦れたような、
そつ、学校でよく聞く音。
イスをずらした音だ・・・！
つまり、人がいる。

考え付くと同時に、足音が反響して聞こえた。鉄格子の向こうにあ
る通路、俺から見て右側の角度的に見えない辺りから響いてくる。
だんだん大きくなつてくるから、近づいてきているのは明白だ。
俺の声が聞こえたのだろうか。この牢屋は音が響く。十分考えられ
た。

十中八九、俺を誘拐した奴だろう。ここが牢屋であることを考え
ば、看守なり見張りなりがいるはず。
俺が目覚めるのを待つていた、といふところだ。

音が近づいてくるにつれて、違和感をいだいた。反響する足音に紛
れて、カシャン、カシャン、と金属が擦れるような音が聞こえる。
なぜ
考える間もなく、足音の主が姿を現した。疑
問も解消した。

金属製の胸当て、腰当て、脛当て、腕当て、さらに顔の上半分から
頭部を覆う兜を身に着けた、男性。

極めつけは腰に差してある剣らしきモノ。兜からは金髪と青い目が
覗いていた。

「どうかううう見ても、兵士だ。それも、中世ヨーロッパの

俺はタイムスリップしたのか？ そして、さらにヨ

一口ツッパへ飛ばされた？

ありえない考えは、当然裏切られた。

「出で。グレイン宰相様がお待ちだ」

兵士が低い声で言った。俺はさらに混乱する。内容もわるいとながら、今この兵士は流暢な日本語を喋ったのだ。中世のヨーロッパに現代と同じ日本語を喋れる人間なんていたはずがない。何かのドッキリ番組か？ 当然の考えが浮かぶが、俺は有名人でもなんでもないから、そんな事をする理由がない。そもそも牢屋のどこにもカメラらしき物はなかつた。

兵士が牢屋の扉の鍵を開けても、情報を整理するのに精一杯な俺が動けずにはいる。兵士はしびれを切らしたのだろう。少々怒気を含んだ声で「早く来い」と言い、右手で俺の左腕をつかんだ。そのまま引きずられていく。抵抗しようとも思つたが、兵士の身長は180cmほどで、腕は俺の倍ほどの太さがある。勝てるはずも無いので、大人しくすることにした。

そして問いかける。

「ここはどこですか？ 僕を解放して下せ」 努めて冷静に声を出した。

兵士は答えない。ただ、俺の方に振り返つて、にやりと笑つた。

ぞつとあるよつた、悪意ある笑み。

俺はこれがイタズラやドッキリの類でないことを悟つた。

混乱、せんご（前書き）

今日は短めです。

混乱、さらに

来た道を戻つていいく兵士に引きずられて牢屋を出る。

牢屋前の通路の先20メートルほどに少し広くなつてゐる空間があり、この兵士が座つていたらしい椅子と机が見えた。さらにその先には木製の扉が見える。

通路を進むにつれて右側に他の牢屋が見えた。俺がいたのと全く同じ内装の牢屋には、無氣力そうな男たちが閉じ込められている。

彼らの服もまた、現代の刑務所なんかではありえないほど簡素で、薄汚れていた。

囚人たちの視線を感じながら、俺は兵士に引きずられていく。

今氣付いたが、俺は学校の制服を着てゐる。学校の帰りに誘拐されたので当然ではあるが、この場所では白のカッターシャツと黒のズボンはかなり浮いているように感じた。まあ、混乱に次ぐ混乱のせいで羞恥心なんて蚊ほども湧いてこないのだが。

木製の扉の前に着くと、兵士は俺の手を離した。兵士の右腕は腰の腰辺りを探つてゐる。そこには。

鍵束があつた。

兵士は十数本の鍵のうち、持つ部分が正方形になつていて、さらにその正方形に四本の横線のくぼみがある鍵を手に取る。

「これは覚えておいたほうが良さそうだ。」

兵士が扉を開けて鍵束を腰に戻すまでの間、俺は鍵の形を頭に叩き込んだ。

なんでさっきこの兵士が牢屋の鍵をあけた時に気付かなかつたのか。あの牢屋に戻る可能性が高いことくらい分かつていただろうに。もう一度牢屋に入れられた時にしつかりと見ておかなくてはならない。

扉の先には一人の兵士がいた。俺を牢屋から連れ出した兵士と全く同じ格好だ。どうやらここで交代するらしい。必ず一人は看守が必要だからだろう。

今度は両脇を一人の兵士に固められて、牢屋前より随分広い通路を進んでいく。相変わらず石壁だが、牢屋の壁より随分綺麗だつた。松明が何本も置かれ、牢屋よりかなり明るい。

目的地は随分と遠いようだつた。いや、直線距離は大したことはないのかもしれないが、通路の曲がり角が多く、分岐点もまた多い。道を覚えようとしたがとても無理だ。道しるべのようなものもないので、この一切の迷いもなく歩き続ける兵士たちはすべて記憶しているのだろう。部屋の扉もかなりの数を見てきた。

途中何人もの兵士たちとすれ違つ。俺を連行している兵士たちは、同僚と日本語で軽い挨拶を交わしていた。

しばらくして、ようやく目的の場所についたようだ。兵士の一人が木製の扉を開ける。

もう一人の兵士とともに部屋に入ると、扉が閉じられた。扉を開けた兵士はそのまま外で待つのかもしれない。俺が逃げ出さないよう

に。

相も変わらず石壁の部屋。何本も置かれた松明のおかげでかなり明るい。今までの通路もそつだつたが、窓がなかつた。

部屋の中には、黒地に金糸でなんとも立派な装飾が施された服を着た、中年の男性がいた。

その男の周囲に、さらに二人の兵士。中年の男性と兵士の明らかな服装の違いから、

この男こそ“グレイン宰相様”なのだろう。

男が口を開く。そして

「レナファスへようこそ。異世界の住人よ

俺を、さうに混乱させた。

混乱、さらに（後書き）

なぜか物語が全然進まない（汗）
次はもっと進みます！

* 投稿してすぐに、主人公の服装を変更しました。

こいつは、何を言つてゐる？

グレインはさらに続ける。

「いや、もう住“人”ではないな。貴様は、これから人ではなくなるのだから」

「何を言ぶつ！」

当然の質問を遮つて、激痛。兵士の一人に顔面を殴られた俺は、勢いのまま床を転がる。

兵士は無言。ただ、その顔には牢屋の看守が見せたのと同じ笑みが浮かんでいた。

「奴隸風情が口を利くな！」
グレインの怒声。

俺はただただ、混乱するしかなかつた。

人ではない？ 奴隸？ 何を言つてゐるんだこいつらは？

殴られた右頬から、じんじんと痛みが伝わつてくる。

「わざわざ異世界から召喚したのだ。貴様には利用価値がある。死ぬまで働いてもらおうか」

利用価値？ 俺には何の才能もない。死ぬまで働く？

冗談じゃない。

「おつと、奴隸にはちゃんと誰の所有物であるか証をつけねばな」
グレインが、兵士の一人に顔を向けるのが見えた。その口が紡ぎだす言葉に

「焼き」にて持つて來い」

一瞬、思考が固まった。

焼きじてだと？　あの、牛に番号をつけたりするやつか？
ばかな、ありえない。こいつらは、正気じやない！

兵士の体が邪魔で見えなかつた、部屋の俺から見て左側の隅。火が
燃え盛る暖炉が見えた。

暖炉からは鉄の棒らしきものが突き出している。

兵士が暖炉から取り出した鉄の棒の先端には、赤熱した金属の立方
体。最端の面には紋章のような印が刻み込まれていた。

まるで判子だ

それが正真正銘の焼きじてだと理解した瞬間、俺は瞬時に立ち上がり
つて背後の扉にとりついていた。

兵士たちが止める間もなく、ドアノブを回す。鍵はかかっていない。

逃げる！

現実はそこまで甘くはなかつた

外開きのドアを左に開くと同時に、右からの拳が俺の鳩尾を捉えた。激痛とともに、部屋の中に送り返される。

再度床を転がった俺が見たのは、扉から室内に入ってくる兵士。さきほど俺をこの部屋に送り届けた二人の片割れだった。

さつきこうなる可能性を考えたばかりだらうがつ……！
焦りのせいが失念していた。

「貴様が逃げ出さうとするなど分かつておる。おい、この奴隸に罰を与えてやれ」

グレインの声に、室内にいる五人の兵士が、心底嬉しそうに頷く。

そこからは、地獄の始まりだった。

突然、後頭部に衝撃。俺の後ろの兵士が蹴飛ばしたのだ。必然的に前方にいる四人の兵士たちの前まで転がる。体勢を立て直す間もなく、今度は下腹部にブーツの爪先が叩き込まれた。

激痛に呻く俺に、兵士たちは容赦なんてしない。

兵士たちの手足が、ろくに抵抗もできない俺に全力で振るわれる。俺は歯を食いしばるしかない。

救いなんて、なかつた。

数分後、兵士たちの暴力がおさまった頃には、俺の感覚は激痛で飽和していた。

体中が痣で覆われ、カッターシャツとズボンにはブーツの足跡が無数についている。

顔も例外なく腫れ上がり、左目が開けられない。

「今日はこれくらいで勘弁してやる。次に逃げ出そうとすれば命はないと思え」

グレインの声が聞こえるが、今の俺はその方向に顔を向ける気力さえ残っていなかつた。

「さて、お楽しみはここからだ。もう一度、焼き」てを持って来い」

くそつたれが……！」

レナファース王国の王都ハイダール。そのほぼ中心に位置する王城レナファース、その地下。
敵が侵入した時の対策としてまるで迷路のよつに張り巡らされた通路に、
異世界の少年の絶叫が響いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0265ba/>

反乱の灯火

2012年1月1日21時47分発行